

宝彩有菜の バガヴァッド・ギーター

text: 宝彩有菜

第2回「アルジュナの闘いとは？」

親族が敵味方に分かれての戦(いくさ)が始まろうとしています。アルジュナはこんな戦をするくらいなら、死んだ方がましだといいますが、御者であり、「神」であるクリシュナは、「闘え」と言います。その理由はいかに？ 瞑想の修行の重要なポイントが、そこに隠されています。

バガヴァッド・ギーターの冒頭はいきなり緊迫した雰囲気が始まります。

アルジュナは、戦の前に、両軍の人々をよく見たいと御者のクリシュナに頼みます。クリシュナは、アルジュナを乗せた戦車を両軍の中央に引き出します。

両軍のなかには、父たち、祖父たち、師匠たち、伯叔父、兄弟、息子、孫、友人たち、また義父たち、親交ある人々がいます。

アルジュナは、この戦場にさまざまな友人や親類縁者が、敵味方に分かれ相対峙(あいたいじ)しているのを見て悲痛の思いに堪えず、クリシュナに言います。

「おおクリシュナよ。血縁の人々が敵意を燃やし、私の目の前で戦おうとしている。それを見ると手足は震え、口は乾き、体は慄えおののく。髪の毛は逆立ち、愛弓は手から滑り落ち、全身の皮膚は燃えるようだ。直立もできず、心はよろめき気は狂いそうだ。おおクリシュナよ、私には不吉な前兆しか見えぬ。血縁の人々を殺して、いったい何の益があるというのか。わが愛するクリシュナよ。私は勝利も領土も幸福も欲しくない。ああ、クリシュナよ、私は彼らに殺されても、彼らを殺したくない。三界の王者となるためにでも彼らと戦う気になれないのに、ましてや、地上の王国のためになど。おおクリシュナよ。彼等を殺せば、私たちは本当に幸福になるというのか？」

”かく言いてアルジュナは、戦場において、戦車の台座にくずおれ坐しつ、矢もろとも弓を投げ棄て、心は憂悶にかき乱されて。”(””は、辻直四郎：訳)

ついに、アルジュナは、戦車の床に座りこみます。ここで第1章が終わります。

第2章冒頭、すると、クリシュナは言います。

”アルジュナよ。女々しさに陥ることなかれ。そは汝にふさわしからず。・・・”とアルジュナを立ち上がらせようとしています。

「女々しいことを言うな。それは君にまったく不似合いだ。卑小な心を捨て、立ち上がれ！」

クリシュナに、そう言われてもアルジュナは立ち上がらず、

「クリシュナよ。ビーシュマやドローナに、どうして私が弓を向けられようか。私はむしろあの方々を礼拝したい。おお、クリシュナよ！ 師と仰ぐ立派な方々を殺すくらいなら、私は乞食になって暮らす方を選ぶ。敵に勝つべきか、また負けるべきか。彼らが死ねば、私も生き甲斐がなくなる。そのような敵と対陣するとは。自分の心の弱さゆえに平静を失い、義に叶う道はいずれか迷い果てた。願わくは最善の方法を教えたまえ。私はあなたの弟子、絶対に服従致す」



クリシュナは、このように気弱になって座り込んだアルジュナを、立ちあがらせ闘わせようとします。そして、アルジュナに向かって、人は死んでも魂は死なないとか、だから人を殺しても罪にはならないなどと、訳の分からない理由を言いますが、アルジュナは納得できません。まあ、私も納得できません。魂が不滅だからといって人を殺して良いはずがありません。

古来、多くの人がこの個所が納得いかないまま、とりあえず先に読み進むことになったと思います。

そして、そのまま少し先に進むと、クリシュナは、

「アルジュナよ、この世で『真理を体得する』には二種の道がある、哲学的思索を好む者には、知識のヨーガ、活動を好む者には、行動(奉仕)のヨーガだ」

とアルジュナに言います。

ここでちょっと「ヨーガ」の説明をしておきますと、「ヨーガ」とは、「修行」「鍛錬」「道」などと言う意味です。幸福や健康になるための方法と言ってもいいです。「ヨーガ」には、「〇〇ヨーガ」「△△ヨーガ」とたくさんの種類があります。それらを大別すると「精神のヨーガ」と「肉体のヨーガ」の二種類になります。

バガヴァッド・ギターに出てくる幾種類もの「ヨーガ」は、すべて「精神のヨーガ」です。ストレッチなどのいわゆる「ヨガ」は、「ハタ・ヨーガ」という「肉体のヨーガ」の一つが進展したものです。

さて、第2章から、クリシュナは、「真理体得」の方法、すなわち「悟る」方法、つまりより健全でより幸せな精神を獲得するための「精神のヨーガ」を、体系的にアルジュナに語り始めます。

そして、さらに詳しい質疑応答がこの後に続きます。「放棄のヨーガ」「瞑想のヨーガ」「神秘のヨーガ」「献身のヨーガ」「離欲のヨーガ」など。それが、延々、18章まで続きます。

「バガヴァッド・ギター」最終章の18章でも、まだ、納得のいかないアルジュナは、派生的な質問をつぎのように執拗に続けています。

「クリシュナよ。では、離欲と結果の放棄の違いについて、何とぞ私にご教示下さい」

クリシュナは、それまで通り、その問いに詳細に答えています。

そして最終的に、「ブラーフマンとの合一」を説明して、「悟ることについての説明を、これですべて終る」「私は、すべてをあなたに伝えた」として説明を終わります。で、アルジュナはそれを聞いて喜んだとあります。

そして、「マハーバーラタ」の第62章つまり、「バガヴァッド・ギター」が、そこで終わり、話は「マハーバーラタ」の第63章、その他の主人公の状況説明へと続いていきます。

バガヴァッド・ギターを読み終えると、バガヴァッド・ギターとはいったいなんであったのかと思います。

大筋を捉えれば、アルジュナがクリシュナに聞いたという形式で書かれた「悟りの教本」です。「修行の知識とノウハウ」です。

しかし、それなら、なにも、よりによって、戦場のど真中の戦車の上で質疑応答しなくてもよいのではないかと思います。そのようなことを聞いたり話したりするのに、もっと、相応しい場所や状況がある

のではないかと思います。

また、人を引き付けた導入部分での疑問、つまり、「親、兄弟、親戚、縁者を殺しても良いのか？」は、納得のいく結論が出ないまま、いつのまにか、うやむやになってしまっています。なぜでしょう？

「笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「そうですね。結局、『立ち上がれ、闘え』と最初にクリシュナが言ったその意味がよく分からないまま、話が終わってしまいますよね。悟ればそれは、もう問題ではないのだといわんばかりですが、どうも、納得がいきませんね。悟ったら人殺しをしてもいいんですか。笑雲先生」

「悟っても、悟らなくても、人殺しをしてもいけない」

「ですよね。でも、クリシュナの説明に『魂にとっては誕生もなく死もなく、元初より存在して永遠に在り続ける。肉体は殺され朽ち滅びるとも、魂は常住にして不壊不滅である。このように魂は不生不滅、不壊不変、無始無終、万古不易であるから、どうして誰かを殺し、また誰かに殺されることがあり得ようか』とありますが」

「そうだね。滅茶苦茶だね」

「滅茶苦茶ですか」

「そうだ。逆を考えたらずぐ分かることだ。誰も、誰かに殺されたくはない」

「それはそうです」

「だったら、誰を殺してもいけないことくらい、すぐ分かることだ。自分が嫌がることを人にして良いということはない」

「それはそうです。当然ですね。じゃあ、クリシュナの言っていることは、最初から、おかしいじゃないですか」

「そうだね。おかしいね」

「だったら、笑雲先生」

「なんだい、小松茸」

「だったら、こんな変な物語の解説なんかしない方が、いいんじゃないですか？」

「ああ、そうだね。笑雲も、ずっと前にバガヴァッド・ギターを読んだときは何だか変だなあと思って、しばらく放って置いた。そのあたりの意味が分からなかったからだ。というより、こじつけ的説明や屁理屈が、いかにも多すぎる。なぜそうなっているのだろうと、考えていくと、あっ、そうかと、その理由がわかった。だから、解説しようと思い直した訳だ」

「ほう、そうですか。どう分かったのですか、笑雲先生」

「いいかい、小松茸。その滅茶苦茶な冒頭の部分を除いては、あとの部分は、体系的、具体的な修行の方法論だ。そこは、目的と手段が、まあ、それなりに合理的に説明されている」

「クシャ草とか、座るための三点セットの部分のようにですね」

「そうだね。でも、冒頭の『闘え』の部分の説明は、たぶん、このバガヴァッド・ギターを語り伝えて来た多くの人達も、分からないから、あれこれ、苦し紛れの理屈を後からつけたのだらうと思いいった」

「なるほど。そう言われてみれば苦し紛れですね。しかも、どの理屈も、納得できませんよね。魂が不滅

だから、殺しても良いなどという部分は、とても危険な思想になりそうですね」

「そうだね。これを、そのまま受け取ると、とんでもないことになる」

「でも、笑雲先生。確かに、クリシュナがそう言ったと書いてありますよ」

「そうだね。小松茸、もともとの設定が分からなくなったので、苦し紛れに後からの人が、理屈を無理やり考え、付け足したのだろう。武人の誉れが云々だとか。闘わなければ恥だとか。とにかく響きが美しくないね。この部分は。品位が違う。たぶん後からのよく分からない人のつけ足したものだろうと思う」

「といたしますと、笑雲先生、もともとはどうなっていたのですか？」

「もともと、バガヴァッド・ギターは、悟りの修行のテキストとして、単独で存在していたのだろうと私は思っている。しかし、それだけでは、後世に伝わっていかないので、マハーバーラタの中に、巧みに組み込んだ人がいたのだと思うわけだ」

「なるほど、組み込んだ。船に乗せたのですね」

「そうだね。マハーバーラタは、いろいろな作品を組み込んでいるから。バガヴァッド・ギターもその一つだ」

「なるほど」

「そして、バガヴァッド・ギターを組み込む時に、精神のヨーガ、つまり心の修行だが、それは、まさに、親や、兄弟、親族との闘いであるという部分を、まっ先に持ってきたのだろうと思う。そうすると話に入りやすい」

「えっ、良く分かりませんが」

「うん、ちょっと説明しよう」

「はい」



心の修行を進めていくということは、今は自動反応になってしまった、幼い頃に作った自分のプログラムや思い込みを、まずは意識していくことです。そして、それらの中には、今となっては要らなくなったプログラムや、要らなくなった思い込みもたくさんありますから、それらを発見したら、それを捨てていくことです。それらがプラカードのように固く強く林立していれば、それらを抜き去ることで、抜去することです。

無意識になってしまっているプログラムや思い込みとは、例えば、「遊んではいけない」「勉強すべし」「一番にならなければいけない」「認められなければいけない」「人を助けるべし」「貧乏ではいけない」「親の言うことを聞かなければいけない」などなど。

ですが、それらの古いプログラムや思い込みは、ほとんど、「親」「兄弟」「親戚」「先生」などが、関与して作られたものです。それらが圧倒的に多いです。

幼児期はどんどん学習していきます。真っ白なキャンバスにどんどん絵を描いていくようなものです。例えば、自ら熱いものに手を触れて痛いを実体験すると「熱いものからすばやく手を引くべし」と学習します。

人間のアタマは優秀ですから、このような実体験からだけでなく、教えられたこと、躰けられたこと、言葉で理解したこと、見たり聞いたりしたこと、想像したこと、疑似体験したことなどからも、どんどん学習を重ねていきます。それらが、行動指針や、生活指針になっていきます。いわゆる、プログラムと

して、成立していきます。それは、良いことですし、当然のことです。それが人間の成長です。

そして、それらのプログラムはやがて、使いやすいように標語化されたり、短絡化されていきます。その方が、すばやい判断に使用できるからです。良いことですし、それも人間の成長です。が、そのように、プログラムの起動が眼にもとまらないくらいに速くなってくると、時として、問題が起こってきます。「どうして、私はすぐに人を羨ましいと思ってしまうのだろう。そして苦しくなるのだろう」とか、「どうして私はすぐに人を非難してしまうのだろう。なぜ、優しい気持ちになれないのだろう」ということになってくる場合もあります。

ほかにも、「相互論理エラー」や「ループ現象」や「一切皆無適応(all-or-nothing approach)」や「過剰傾斜反応」等いろいろな問題が起こってきます。もともとは良い、意味のあるプログラムだったのですが、それが無自覚、無意識に、しかも、すばやく起動するようになってくると、アタマは、そのプログラムに沿って考えますから、問題が起こるのは当然です。

そのような仕組みであることが分かってきて、さて、では、今は不要となった、例えば、「一番でなければ意味がない」というようなプログラムを捨てたいとしみじみ思ったとします。

「一番でなくてもいいんだ」と思い直そうとします。「認められなくてもいいのだ」とか「私は私のままで大丈夫だ」とか「自分のことより人の幸せを考えよう」とか、いろいろ思い直すために工夫をしますが、そのたびに、耳の奥では、「一番でなければ意味がないぞ!」という、例えば、お父さんの口癖が聞こえたりします。

そして、耳の奥で叫んでいる、このお父さんの口を塞がねば、自分はこのプログラムから自由になれないのだと分かります。

その他にも、さまざまなプログラムが、そのように、親、兄弟、親戚、先生の優しい声や、怖い声、優しい顔や、怖い顔などと一緒に成立していることがわかってきます。

つまり、捨てたいと思ったどのプログラムにおいても、当初それを学習したときの当該関係者がそこに立ち現れるということになります。



プログラムの抜去をしようとする、その関係者を敵に回し

て戦い、勝たねばなりません。しかし、彼らは、幼い自分を愛し、慈しみ、育み、助けてくれた人たちばかりです。そのような人々を敵に回して、戦意を高揚させて戦い抜くということは、アルジュナでなくてもできません。そこで、クリシュナは、立ち上がれ、闘えと励ますわけです。もったもなことです。ここで怯んでは精神のヨーガが前に進みません。

戦う相手は、自分が幼いころに出会っていた、父親であり、母親であり、兄であり、叔父であり、叔母であり、親戚の人であり、先生などです。今の現実の親や親戚ではなく、自分の記憶の中に存在している「心象」の親であり、親戚の人々です。「イメージ」としてアタマの中にいる人々です。それと、闘えと言っているわけです。それを打ち滅ぼさない限り、不要になったプログラムを抜くわけにいかないのです。闘わなければ、修行は前には進みません。

しかし、そうですね。それと闘うとなると、アルジュナの言う通りです。心が萎えてしまうわけです。そこで、クリシュナが、何度も「立ち上がれ、闘え」と言っているわけです。「汝の心象の親と闘え」、「汝の心象の親族と闘え」、「汝の心象の先生と闘え」です。そして、不要になったプログラムを抜去しなさい、つまり、抜き去りなさいというわけです。

「なんだ、そういうわけですか。笑雲先生」

「そうだ。小松茸。これは、闘いだ、心の中の闘いだ。自分のアタマの描いている心象の親とか、心象の人々との闘いだ」

「なんだ、それなら分かりますよ。それはそうです。プログラムを覚える過程でそれらの人々の“お世話”になってますからね。まあ、ほとんどは、躰けられたということですけど。外そうとすると、その人達のイメージと闘わなければなりませんね」

「そうだ。その闘いが結構、難儀なのだ。だから、勇気をもって闘え、怯むなとクリシュナが激励しているわけだ。そしてその方法を縷々説明しているわけだ」

「そうですね。後続の説明は、全部、修行の仕方ですね」

「そうだね。クリシュナは、悟りを教えている先生だからね」

「では、笑雲先生、なぜ、このように現実の戦いかと誤解しそうな、紛らわしい書き方をしているのですか」

「そうだね。さっきも言ったように、その方が組み込みやすいというのはあるだろうね。あとは、さあ、どうだろう。その方が、物語を読み進むのにやはり面白いからではないかな。これだけの修行のノウハウを叙事詩の中に無理やり挿入して、最後まで飽きずに読ませようとする、これは案外良い工夫だったかもしれない」

「なるほど、苦肉の良策というわけですね」

「そうだね。おかげで、なんとか、マハーバーラタという大叙事詩のなかに、ちゃっかり、瞑想の修行の方法を挿入することができたのだろうし、おかげで、まんまと2千年くらい経ても、ちゃんとここまで伝わってきたということだ。だから、まあ、素晴らしい工夫だと思う」

「なるほど、そういう、工夫があったのですね」

「そうだね。ということで、バガヴァッド・ギターの工夫は分かったから、さっそく、伝わって来た、その貴重な本体の修行の方法の解説を始めよう」

「あの一、先生、残念ですが」

「なんだい、小松茸。いきなりお辞儀なんかして」

「残念ですが、紙面の都合で、このあたりでおしまいだそうです」

「あれ、そうかい。では、しかたない次回から解説ということで」

「はい、そうお願いします。(ふっ、ふっ、ふっ、今回もお話だけで終わった、しめしめ)」

「おい、何か言ったか小松茸」

「いえ、何も」

「修行ができなくて残念だから、小松茸は居残って修行したいとか聞こえたが？」

「ええ——っ、まっ、まさかあ」

「あはははは、やっぱり空耳か」

「あはははは」

「あはははは」